連載・雑草のよもやま《第29回》

江戸時代，絵師と本草家の雑草ヒエの図

森田　弘彦

2021年の年の暮れに，TV番組「開運！何でも鑑定団」で「老舗のお宝」という企画があり，ある老舗の旧家の方が江戸時代の画本を出品されて，これが数千万円の評価額となった。1788（天明8）年刊の「画本虫ゑらみ」という虫譜で，高名な浮世絵師喜多川歌麿の処女作だそうで，何枚かの図版がTV画面に映された。虫譜ではあるが，虫は植物に止まった状態で描かれているので，その植物も写実的であった。この高額では古書店での入手もかなわないので，国立国会図書館のデジタルコレクションを覗いたところ，ありがたいことに収録されていた。江戸時代後期の狂歌師・戯作者・国学者などとして知られる宿屋飯盛（石川雅望）が見開きページに虫に関わる狂歌を2首ずつ置いて，喜多川歌麿が野外での虫と植物の状態を彩色で描いた。6枚目には「松虫　蛍」で，イヌビエ（またはヒメイヌビエ）と穂状の花序を持つ双子葉植物（不詳：ホザキシモツケ？　またはタデの類？）である（図-1）。松虫と蛍への狂歌は，Webの記事の助けも借りると次の様に読める。

松虫　　土師掻安

蚊屋つりて人まつ虫ハなくばか里なにおもしろ貴袮ところじゃない

蛍　　酒樂齋瀧麿

佐保川の水も汲みます身ハ蛍中よし乃ち乃くさ連ゑんとて

2枚目の「馬追虫　むかで」にはカヤツリグサとトリカブト（図-2），10枚目の「虵　とかけ」にはツユクサが鮮やかに描かれており，これら他の画面と違ってイヌビエの画面のみがモノクロコピーのようで，初めは「国会図書館の所蔵品ではこの部分が欠けていて，白黒コピーで補ったか？」と邪推した。しかしよく考えると，ここはホタルが活動する宵闇の場面であることを理解した。筆者はかつて「雑草ヒエには，食用・薬用・鑑賞用など人間の益になる要素が甚だ少ないため，これらに関する話題に乏しい。」と書いたことがある（農薬春秋91，2014）。歌麿が観賞用にイヌビエを描いていたことは筆者にとって「目からウロコ」で，ここに前言を撤回したい。

「農薬春秋」の記事では江戸時代から明治時代初期までのいくつかの農書などでの雑草ヒエの記述を抜粋して紹介したが，雑草ヒエの図はこれらの農書にはない。「農業全書（宮崎安貞，1679　再板1815）や「和漢三才圖繪（寺島良安1712）」での「稗」の図は作物のヒエのようで，幕末の「萬葉集品物圖繪（鹿持雅澄 幕末？）」では「打ちし田に稗は数多にありといへど択えし我ぞ夜ひとり宿る（巻11：2476）」と，雑草ヒエと考えられる和歌に添えたヒエの図は作物らしいが雑草か否かは判然としない（図-3）。

明らかに「雑草」とわかるヒエの図は，本草学を身につけた旗本岩崎常正（灌園）が1828（文政11）年に完成させた「本草圖譜」で「巻四十一　穀部」の「穆子　ひえ」の次に描いた「水稗」と「旱稗」である。これも国会図書館のデジタルコレクションで画像として取り出すことができ，自生（野生）のヒエに以下の説明がある（図-4, 5）。

図–1　「松虫　蛍」の狂歌に添えられたイヌビエまたはヒメイヌビエと見られる雑草ヒエの図
（喜多川歌麿（筆）・宿屋飯盛（撰）「画本蟲えらみ」，1788：国立国会図書館デジタルコレクションによる）

図–2　「馬追虫　むかて」に添えられたカヤツリグサとトリカブトの図
（図-1に同じ：国立国会図書館デジタルコレクションによる）

図–3　農書などでの作物のヒエと見られる図
（A：宮崎安貞「再板 農業全書」，1815，B：寺島良安「和漢三才圖繪」，1712，C：鹿持雅澄「萬葉集品物圖繪」，幕末？　BC：国立国会図書館デジタルコレクションによる）

水稗　集解時珍　ミつ飛え　くさひえ　ヒルス阿蘭

稗ハ田野自生する所の物二種あり 水稗ハ水田中に生ひ苗葉稗のひゑに似て長大 穂ハ狼尾草（らうびさう）に似て粗大 微赤色なり

旱稗　集解時珍　いぬひえ　のひえ　はくさ

平陸道傍に多し 莖葉狗尾草に似て穂ハ水稗に似て小く短く紫褐色の毛あり 又芒のある物あり紫色の物あり くろいぬひえといふ 又奥州にて，くまひえ尾州にてくろひえといふ 集解の烏禾に充る説あれとも烏禾ハ別物奈り

「本草圖譜」は 1980 年に同朋舎出版によって復刻され，ここには京都大学の植物分類学の北村四郎先生などによる「総合解説」がつけられた。上記の国会図書館とは異なる底本であるが，北村先生の「水稗」と「旱稗」の解説は以下のようである（北村四郎・塚本洋太郎・木島正夫 「本草図譜総合解説　第二巻」，1986）。

水稗　みずびえ　くさひえ

タイヌビエ　（学名）Echinochloa crusgalli (L.) var.orizicola (Vasinger) Ohwi（筆者注：原文のママ，正しくは oryzicola）

（分布）日本・朝鮮・ウスリー・蒙古・中国　葉の縁は著しく肥厚して白条となるのが特徴。この図ではそれがわからない。var. orizicola と印度の var. hispidula Hack. とを同じとする考えもある。また，この両者を種として E. phyllopogon Stapf. とする見解もある。

水稗（『救荒本草』）は「水稗は水田辺に生ず」によるものであるが，『啓蒙』ではこれをクサビエ，ミズビエとした。

旱稗　いぬびえ　のびえ

イヌビエ　イネ科　（学名）Echinochloa crusgalli (L.) Beauv. var. caudata (Roshev.) Kitagawa f. praticola (Ohwi) Koyama

旱稗（『救荒本草』）は「旱稗は田野中に生ず」とある。イヌビエは小穂に芒がないか，または短芒がある。図は芒のないものを描いている。

一種　くろいぬひえ　くまびえ

ケイヌビエ　（学名）Echinochloa crusgalli (L.) var. caudata (Roshev.) Kitagawa f. caudata

図–4　作物ヒエの品種「さるびえ」の次に掲載された自生ヒエ「水稗」の図
（左ページ：岩崎常正「本草圖譜　第 41　穀部」，1828：国立国会図書館デジタルコレクションによる）

図–5　自生ヒエ「旱稗」２品の図
（図 -4 に同じ：国立国会図書館デジタルコレクションによる）

（分布）日本・朝鮮・中国　『本草綱目』にある烏禾や稊にあたる。灌園は「別物なるべし」とする。

北村先生の雑草ヒエの学名の処理は，雑草学会などで用いられる薮野先生の整理に基づくものとは少し異なるが，「葉の縁の肥厚がこの図ではわからない」としながらも「水稗」をタイヌビエと判定された。これは「水田中に生し」などの記述も重視されたのであろうが，灌園の「水稗」の図（図 -4）はタイヌビエよりは有芒のイヌビエの穂に見える。

雑草ヒエの種類を穂の写真で判定するのはなかなかの難事なので，筆者は撮影後に穂を採取して種類を確認することにしている。現代でもこうなので，江戸時代の絵画で雑草ヒエの種類を判定するのはもっと難しいことだが，歌麿の画ではイヌビエ（またはヒメイヌビエ）とわかり，一方灌園の図譜ではタイヌビエとイヌビエの区別が判然としない。対象の複雑さの差もあろうが，対象を伝える上で芸術家（絵師）の感性が学者（本草家）の知識を上回っているのかも知れない。読者諸賢におかれては，障壁画や浮世絵などで古い雑草ヒエの図を見かけたら，ご教示くださるようよろしくお願いしたい。